インドネシア、バリの文化と社会

文化人類学の視点から

村尾　静二

Culture and Society of Bali, Indonesia

Cultural Anthropological Study

Seiji MURAO

Abstract

This paper considers and outlines the culture and society of Balinese people in Indonesia based on previous research and the fieldwork experience. This is to lay the foundation for more specific studies on Balinese culture in future.

As a composition, Chapter 1 describes the nature and history of Bali and the world view of Balinese people, Chapter 2 describes a multidimensional society organized by various groups from territorial and blood ties to art, and Chapter 3 describes the religious life based on Balinese Hinduism.

キーワード：バリ、インドネシア、文化、社会、宗教
Keywords：Bali, Indonesia, culture, society, religion

本論稿は、インドネシアのバリ島に生きる人々（民族名はバリ人 orang Bali）の文化や社会のあり方について、先行研究およびフィールドワーク経験をもとに考察し、整理してその概要を体系的に提示することにより、今後に続く各論研究の基礎を築くことを目的としている。

構成として、第 1 章では、バリ島の自然と歴史、そのなかで築かれたバリ人の世界観について、第 2 章では、地縁・血縁から芸術まで、様々な組織集団により築かれる多元的社会構造について、第 3 章では、バリ・ヒンドゥーに基づいて形成されるバリ人の宗教的生活世界について論じる。

１．バリ人の世界観

本章では、バリ人の世界観について、自然、地理、生活、生業、歴史などの視点に基づいて論じる。次に、バリ島人の生活世界はどのように築かれ、認識されているのか、その特徴について、二元論に基づく象徴的世界観、および、複数の暦に基づく多元的時間を事例に論じる。

１.１　インドネシアのなかのバリ島

インドネシアは、西から、スマトラ島、ジャワ島、カリマンタン島（マレーシア地域あり）、スラウェシ島、ニューギニア島（パプアニューギニア地域あり）といった大きな島をはじめとして、1 万 4 千を超える島々からなる島嶼国家であり、東南アジアでは最大、世界では 15 番目に広い国土を有する。ここに現在、約２億 6 千万人が住んでおり、人口規模では世界で 4 番目に大きな国である（写真 1,2）。

１.２　来歴

バリ島は長い歴史を通して、インドネシアの中心の島であるジャワ島の影響下におかれてきた。それゆえ、ジャワ島で興った諸王国の記録から、バリ島の歴史を紐解くことができる。その記録によると、バリ島の歴史は、大きく二つの時代により捉えることができる。第一の時代は 8 世紀から 11 世紀にかけてであり、この時代、バリ島では古くから伝わるバリ土着の文化がある一方、ジャワ島の王朝から様々な影響を受けることになった。バリ島に影響を与えた代表的な王朝は、仏教を信仰したシャイレンドラ王朝とヒンドゥー教を信仰したマタラム王朝である。その後 16 世紀になると、ジャワ島では、イスラーム勢力が台頭する。それにより、それまでジャワ島の中東部を治めていた、ヒンドゥー教を信仰するマジャパヒト王朝は次第に衰退し、マジャパヒト王朝の僧侶や貴族、工芸師たちは新天地を求めてバリ島に移り住むようになった。こうして、現在のバリ島人社会の基盤が形成されていくことになる。その後 20 世紀初頭には、オランダの支配下に置かれ、観光化の時代を迎える（吉田 1992:16-36）。このように、バリ島はそれぞれの時代ごとにジャワ島や国外から様々な影響を受け、世界有数の観光地として現在に至っている。

１.３　生活と生業

バリ島はインドネシアのひとつの州であるバリ州を構成する。使用言語は、国語であるインドネシア語（bahasa Indonesia）とバリ人の民族語であるバリ語（bahasa Bali）であり、官公庁や学校ではインドネシア語、日常生活ではバリ語が使われる。人口は約 432 万人。インドネシアは 300 を超える民族からなる多民族国家であり、そのなかでバリ島人は 11 番目に大きな民族であり、人口は約 432 万人（Provinsi Bali 2020）。バリ島の面積は 5,322 キロ平方メートルであり、これは東京都の約 2.5 倍の広さに相当する。州都はデンパサール（Denpasar）。宗教は独自のバリ・ヒンドゥー（Hindu Bali）が信仰されている。インドネシアは世界でイスラーム教徒が最も多い国として知られており、国民の約 87 パーセントがイスラーム教徒であるが、バリ島人はバリ・ヒンドゥーを信仰している。主要産業は、都市部では観光業と商業が中心であり、一方、バリ島の大部分をしめる農村では水稲耕作を中心とした農業が盛んに行われ、米を主食とする（写真 3）。

１.４　二元論に基づく象徴的世界観

バリ島人は、文化的な特徴として、自然、生活空間、文化に通底する二元論の感覚を大事にしている。この二元論は、象徴的な価値体系を築き、バリ島人の精神構造の基礎をなすといわれている。例えば、バリ島人は方向に特別な意味を読み取り、これは方向の象徴性といわれる。特に山側、つまり聖なる山として信仰の対象となっているアグン山（Gunung Agung）がある方向は、バリ語でカジャ（kaja）と呼ばれ、聖なる場所とされる。一般的に、バリの家屋では敷地内のカジャの方向に屋敷寺（sanga）が建てられている。屋敷寺では家族が日々の祈りを捧げ、儀礼を行い、家族の安寧を願う。家屋のなかで最も重要な場所が屋敷寺であり、その設置場所は空間的象徴性に基づく神聖性によって厳密に決められている。一方、海側はバリ語でクロッド（kelod）と呼ばれ、穢れた場所とされる（Eiseman 1990a:2-10）（写真 4,5）。

このような方向の象徴性とならび大事にされているのが空間の象徴性である。空間の象徴性とは空間の位置に応じて清浄もしくは不浄といった二元論的な意味を読み取ることをいう。例えば、高いと低い、右と左といった身近な空間にも清浄もしくは不浄といった意味が厳密に読み取られる。身体を例にとると、身体のなかでも高い場所にある頭は、神が宿る神聖な場所と考えられている。そのため

に、子どもの頭をなでることは、ことに他人の子どもの場合には避けられるのが一般的である。また、食事や握手の際には右手を使うのが一般的であり、それは左手は不浄とされているからである。バリ人の世界観は、まずはこのような方向や空間に織り込まれた象徴性として理解することができる。

１.５　複数の暦に基づく多元的時間

方向や空間に織り込まれた象徴性と同様に、時間においてもバリ島人は独自の文化的特徴を有する。それはバリ島人の暦に端的に表れており、バリ島人は同時に三つの暦を生きている。官公庁や学校では西暦が使われる。西暦は太陽暦をもとにしており、地球が太陽の周りをまわる周期をもとに数えられる。インドネシアでは西暦に基づいて、毎年 8 月 17 日はインドネシア独立記念日と定められており、バリ島でもこの日は独立記念日を祝う。バリには、このほかに二つの暦がある。

ウク暦（wuku）は 210 日を 1 年とする暦である。この暦は、7 日からなる 30 のウク（週を数える独自の単位）により構成されるため、210 日を 1 年とする。ウク暦が使われるのは宗教儀礼に関わるときであり、多くの宗教儀礼はウク歴に基づいて行われる。もうひとつの暦であるサカ暦（saka）は、月の満ち欠けにより満月を数える太陰暦であり、多くの農耕儀礼はこのサカ暦に基づいて行われる。

つまり、行政や学校、もしくは独立記念日のように民族の枠を越えてインドネシアで共有すべきことは西暦、宗教儀礼は複雑な計算に基づくウク暦、農耕儀礼は月のめぐりに基づくサカ暦で数えられることになる。この慣習は、現在においても厳密に踏襲されている。とくにウク暦は他の二つの暦よりも数え方が複雑なため、バリの各家庭では、この三つの暦をひとめで知ることができる特別なカレンダーが使われ、人々はカレンダーとともに、多元的な日々を生きている。

２．バリ島人の社会

バリ島には、親族や家族の絆である血縁、同じ共同体の住民として協力して生活するもの同士の絆である地縁、さらには、職業や芸術などに基づく組織集団に基づく縁が存在する。そして、村人は複数の組織集団に所属することにより、社会の様々な側面と関わり、多元的な生活世界を営んでいる。本章では、バリ社会の特徴といわれる多元的な社会構造をカースト制度、親族集団や共同体に基づく組織集団、そして、バリの音楽を代表するガムランや舞踊など芸術に基づく組織集団という三つの視点から論じる。

２.１　バリ社会におけるカースト

バリ・ヒンドゥーを信仰するバリの社会では、すべての人はカースト（kasta）という身分制度に基づいて生きることになる。カーストは世襲されるため、子は親のカーストを受け継ぐことになる。カーストに関しては、最大のヒンドゥー教国であるインドのカースト制度はよく知られているが、社会を厳しく階層化するインドのカーストにくらべると、バリのカーストはより緩やかな制度ということができる。

バリ社会におけるカーストは次の四つの身分により構成されている。最初の身分はブラフマナ（Brahmana）と呼ばれるもので、ここに含まれるのは僧侶である。バリの社会では、宗教は生活世界の基盤であり、その導き手である僧侶には特別な身分が与えられており、その職は世襲されるものとして守られている。僧侶の身分であることがわかるしるしとして、この身分にある人々の名前の最初に、男性ならイダ・バグース（Ida Bagus）、女性であればイダ・アユ（Ida Ayu）という称号が付けられ

ている。

その次の身分はカサトリア（Ksatria）と呼ばれるもので、ここに含まれるのは「王族」である。バリ島の歴史を振り返ると 17 世紀から 18 世紀にかけて、バリ島は複数の王国がしのぎを削る群雄割拠の時代にあった。複数の王国とは、バドゥン、バンリ、ブレレン、ギャニャール、ジュンブラナ、カランガスム、クルンクン、タバナン、そして、ムングイという九つの王国をいう。ムングイ王国は後に消滅するが、現在のバリの行政区は、残った八つの王国のそれぞれの領土を県に置き換え、それにバリの州都であるデンパサール市を加えて構成されている。このように、バリのそれぞれの地域では、王族の子孫がいまも尊厳をあつめ、政治から経済まで様々な影響力を持っている。王族の身分であることがわかるしるしとして、この身分にある人々の名前の最初に、チョコルダ（Cokorda）あるいはアナック・アグン（Anak Agung）、もしくは男性の場合はデワ（Dewa）、女性の場合はデウィ（Dewi）といった称号が付けられる。

その次の身分はウェシア（Wesia）と呼ばれるもので、ここに含まれるのは貴族である。17 世紀から 18 世紀にかけての王国の時代に、各地方を治めていた貴族の血筋にあたるのがウェシアである。貴族の身分であることがわかるしるしとして、この身分にある人々の名前の最初に、グスティ（Gusti）という称号が付けられる。

そして四つ目の身分はスードラ（Sudra）と呼ばれるもので、ここに含まれるのは平民である。その多くは代々農民であった。平民の身分であることがわかるしるしとして、この身分にある人々の名前の最初に、男性であればイ（I）、女性であればニ（Ni）という称号が付けられる。

以上、四つのカーストのうち、ブラフマナ、クサトリア、ウェシアは、バリの言葉でトリワンサ（triwangsa）、つまり高い位にある人々と位置づけられ、平民の身分であるスードラと区別されることもある。人口比率として、最初の三つのカーストであるトリワンサは全体の 10 パーセント、平民であるスードラは 90 パーセントを占める（Eiseman 1990a:25-37）（写真 6）。

２.２　慣習村、親族集団、灌漑施設などに基づく組織集

それでは、バリ島ではカーストによる身分制度のもと、具体的にどのような社会が築かれているのか、二つの組織集団を中心に説明する。最初に取り上げるのは、慣習村、親族集団、灌漑施設などに基づく組織集団である。

バリの人々にとって地域生活の基盤となるのは伝統的に形成されてきた慣習村であり、現地の言葉でバンジャール（banjar）という。バンジャールは村人にとって、村の単位以上のもの、ともに助け合う共同体のようなものとして、村人の生活の基盤となっている。宗教儀礼や冠婚葬祭、伝統文化に基づく芸能など、バリの社会において重要な活動はいずれも共同体としてのバンジャールを基盤にして行われる。それゆえ、バリ島人はバンジャールに対して、とても強い帰属意識を有している。

そして、バンジャールに基づく生活世界のなかで最も親密な単位となるのは家族・親族集団である。バリでは、家屋や田畑などの家督は、父親から息子へと男の血筋に基づいて相続されることが多いため、父系社会を形成しているといわれるが、実際には、家督の相続は男女間で様々なかたちをとることも多いことから、男と女の両方が家督を相続する双系社会ともいわれている。バリの社会では、血縁のある複数の家族が共同で生活する大家族・親族集団が長らくバンジャールの最小単位となってきたが、現在では核家族もみられるようになってきた。

バンジャール、家族・親族集団に続いてあげられるのは、灌漑施設などに基づく組織集団である。バリの主要産業は農業である。田圃に水を引いて稲をつくる水稲耕作はその中心であり、自然の豊か

さの象徴でもある。そのため豊作を祈る儀礼も多く、バリ島人の精神文化とも深く関わってきた。田圃には、慣習に基づき祖先から相続され、売買が許されないものと、売買可能なものとがある。慣習に基づいて相続される田圃は家屋が建つのと同じバンジャールのなかにあることがほとんどであるのに対し、売買により新たに得た田圃はバンジャールの外側にあることも多い。そして、地主はそれぞれの田圃で水利組織に所属することになる。この水利組織は現地語でスバック（subak）といわれる。スバックは、山から流れる水がそれぞれの田圃に平等に行き渡るように灌漑施設を整え、豊作を願う儀礼を共同で行い、稲の女神デウィ・スリを祀る祠を共同で管理する。このように、スバックもまた、バリの農村社会で重要なつながりを形成し、それは時にバンジャールの境界を越えて組織されることになる（Eiseman 1990b:72-80）。

２.３　音楽や舞踊など芸術に基づく組織集団

バリの社会では、芸術は、宗教や慣習と同様に生活世界の規範になるものとして尊重されている。それゆえ、とくに農村社会では、多くの村人が芸術活動にも関わっている。ガムランと呼ばれる打楽器の演奏、伝統舞踊、そして、宗教にもとづく唱歌などは、その代表とされる。技の稽古を目的とした集会が定期的に行われ、その成果は儀礼の場において披露される。バリ島民は農民であると同時に芸術家でもある、とよくいわれるが、それはこのような理由による。また、芸術の分野だけではなく、青年同士で集団を組織して儀礼の運営をになう青年団、村の治安を維持するために活動する自警団など、様々な集団が、慣習村であるバンジャールの範囲を越えて多元的かつ柔軟に組織されている。このような組織のありようのことをバリ語でスカ（seka）という。

このように、バリの人々は、それぞれが複数の組織集団の成員となり、その参加を通して様々な人間関係を築くことにより、社会そのものを活性化させている。アメリカの文化人類学者クリフォード・ギアツはこのような社会の特徴を多元的集団性という言葉でとらえている（ギアツ 1990:54-61）。

３．バリ人の宗教

インドネシアは数多くの民族からなる多民族国家であり、バリ島人はそのなかのひとつの民族であり、宗教に関していうと、バリ島人はバリ・ヒンドゥーという独自の宗教を信仰する。本章では、宗教に基づき形成されるバリ島人の生活世界について、宗教の概要、儀礼、代表的な年中行事という三つの視点から論じる。

３.１　バリ・ヒンドゥー

バリ・ヒンドゥーは、バリ島内において古来伝えられてきた土着の信仰とバリ島に隣接するジャワ島から伝えられた仏教やヒンドゥー教が習合してできたバリ独自の信仰である。ヒンドゥー教はインドを起源とする多神教であり、バリ・ヒンドゥーもまた、もとは多神教であった。1945 年にインドネシアが独立宣言をした際、インドネシア建国五原則（これをパンチャシラ Pancasila という）のひとつとして、インドネシアにおける信仰の対象は唯一神であることが正式に定められることになった。この原則に基づいて、バリ・ヒンドゥーでは、サンヒャン・ウィディ（Sang Hyang Widhi）を最高神とする宗教的世界観が新たに体系化され、それがバリ島人の宗教となり、受け入れられてきた。

バリ島では、信仰に基づく生活世界の中心にあるのは寺院である。それぞれの村には、異なる種類の三つの寺院が設置されており、これらを合わせて三位一体の寺院（カヤンガン・ティガ kayangan tiga）

という。寺院のことをインドネシア語ではプラといい、プラ・バレ・アグン（pura bale agung もしくは、プラ・デサ pura desa）は大会議堂寺院を意味する。そこには集会所が併設されており、村の集会、宗教活動、祝いごとなどが行われる。プラ・プセ（pura puseh）は村の起源となる古い祠をまつる寺院であり、プラ・ダレム（pura dalem）は死者をまつる寺院である。この三つの寺院は順に、ヒンドゥーの三大神であるブラフマ、ウィシュヌ、シワに対応すると考えられている。また、ブラ・バレ・アグンとプラ・プセは村の山側の聖なる場所に建てられており、一方、プラ・ダレムは村の海側の穢れた場所に建てられ、そばには墓地があるのが一般的である。

村人は日頃はそれぞれの家にある屋敷寺において神に祈りを捧げ、儀礼の日には寺院に集い集団で祈りを捧げる。神に祈りを捧げ、村を浄め、平安を保つことは、住民の最も基本的な義務と考えられている。

３.２　五つの儀礼

バリの社会では、日々の祈りとともに儀礼が重要な意味を持つ。バリの儀礼は、主として五つの種類から構成されている。その最初は、お祓いを目的とする浄化儀礼である。暦のうえで聖なる力が後退するとされる不吉な日、村の神聖性が穢されたとき、さらには、病気の流行、天候不順、火山の噴火、地震、津波などの災害、そして、テロによる事件が起きたときにも、そのような負の力をなだめ、聖なるものと邪悪なもののバランスを保つための儀礼が行われる。次に、通過儀礼がある。バリの場合、出生時、生後 12 日、42 日、3 ヶ月、そして 210 日（ウク暦に基づく最初の誕生日）に通過儀礼が行われる。その後の通過儀礼は結婚式であり、結婚するに際しては事前に歯を削る削歯儀礼が行われる。これに続く三つ目の儀礼は、人の死に際して行われる葬送儀礼である。四つ目の儀礼は、神に対する儀礼であり、その代表的なものは、寺院に祀られる神に対して行われるオダランといわれる儀礼、祖霊神に対して行われるガルンガン（Galungan）、クニンガン（Kuningan）といわれる儀礼である。これらの儀礼に関しては、次の項であらためて論じる。そして、五つ目の儀礼は、祭祀になるための通過儀礼である。祭祀になる資格はカーストによって定められており、祭祀は村人の信仰生活において重要な役割を果たすため、他の儀礼とならび重視されている（中村 1995:33-58）（写真 7）。

３.３　代表的な年中行事

バリの代表的な年中行事には、さきほど五つの儀礼のなかで言及した、オダラン、ガルンガンとクニンガン、そしてニュピがある。オダラン（Odalan）とは、先述の通り、各村の寺院に祀られる神の起源に基づき、ゆかりのある日に寺院の神を祝う儀礼である。バリ島を訪れると、正装をした村人たちが列になり楽器の伴奏にあわせて歩いていたり、寺院に多くの村人が正装をして集まり、大きな寺院になると屋台もでて、そのなかで村人たちが儀礼をしている風景に出会うことがよくあるが、その多くはオダランである。オダランは村により開催日が異なるのに対し、210 日を周期とするウク暦に基づいて、祖先の霊や自然の神々を祀るのがガルンガンとクニンガンである。具体的には、年に一度、祖先の霊や自然の神々を自分たちの生活空間に迎え入れるのがガルンガン、その 10 日後に、迎え入れた霊や神々を送り出すのがクニンガンといわれる儀礼である。オダラン、ガルンガンとクニンガンの日には、村人全員が寺院に集まり礼拝を行い、仮面劇のトペン（Topeng）、影絵人形芝居であるワヤン・クリ（Wayang Kulit）、そして、聖獣バロンと魔女ランダがたたかうチャロナラン（Calonarang）という劇が上演される（写真 8）。

一方、ニュピ（Nyepi）は、太陰暦であるサカ暦の第 10 の月に行われる儀礼である。ニュピの前日

はこの時期に地上に現れるとされる悪霊を祓うため、それぞれの村で若者たちが手作りした派手な山車が村中を練り歩く。そして、ニュピ当日は、外出、仕事、電気や火の使用、殺生が禁じられ、家のなかで静かに瞑想して悪霊が去るのを待つ。夜になっても電気や火はほとんど使わず、この日はバリの空港も閉鎖されるため、バリ島全体が暗闇に包まれる。

以上、バリ人の生活世界について自然、社会、宗教に着目しながら文化人類学の視点から論じてきた。歴史を振り返ると、バリ島では 1920 年代、オランダ植民地下において観光化が始まり、世界から観光客を受け入れてきた。現在、バリ島への観光客は、年間 488 万人にのぼり、そのなかには 23 万人の日本人も含まれている。東京都の 2.5 倍ほどの面積の島に、毎月約 40 万人もの観光客が訪れる世界有数の観光地になっている。観光と文化の関係でいうと、これまで世界では、観光がひとつの契機となるなか、その地域に固有の文化が劇的にかたちを変え、ときに消滅する歴史が繰り返されてきた。そのような歴史を思い出すとき、バリ島における観光化の興隆は、各地に伝わる文化の現在と未来に大きな影響力を持つかもしれないという懸念はある。

その一方で、バリ人は、共同体としての慣習村バンジャールへの強い帰属意識をつねに持ち、祖先より伝えられてきた宗教、慣習、芸術を最優先に生活世界を築いてきた。それは、バリ島が世界有数の観光地になったいまも同じであり、観光は宗教、慣習、芸術に準ずるものとして、共存が図られている。バリの文化の最大の魅力は、いまもなおこのような文化規範を最優先に生活世界が築かれていることにあるように思われる。

グローバリゼーションと観光化が広がるなか、地域文化、伝統文化の継承と創造（再創造）は文化人類学においてますます重要なテーマとなっている。次回の論考では、バリの芸術を事例に、文化の継承と創造（再創造）の歴史を振り返り、バリの社会において文化が活性化され続けていることの文化的背景とその実情についてフィールドワークの経験に基づきながら考察する。

参考文献

石井米雄監修『インドネシアの事典』同朋社出版、1994 年。
イ・ワヤン・バドリカ『インドネシアの歴史』石井和子監訳、明石書房、2008 年。
クリフォード・ギアツ『ヌガラ 19 世紀バリの劇場国家』小泉潤二訳、みすず書房、1990 年。
中村潔「バリの儀礼と共同体」、吉田禎吾監修、河野亮仙・中村潔編『神々の島バリ バリ＝ヒンドゥーの儀礼と芸能』春秋社、1995 年。
吉田禎吾『バリ島民 祭りと花のコスモロジー』弘文堂、1992 年。
Badan Pusat Statistik Provinsi Bali（バリ州統計局）*Sensus 2020*. https://bali.bps.go.id（2021 年 2 月 10 日）
Eiseman, Fred B *Bali Sekala and Niskala 1 Essay on Religion, Ritual, and Art*. Periplus Editions, Singapore, 1990a.
Eiseman, Fred B *Bali Sekala and Niskala 2 Essay on Society, Tradition, and Craft.* Periplus Editions, Singapore, 1990b.

写真

写真 1　東南アジアの地図。白い枠で縁取られているのがインドネシア。（Google map より）

写真 2　バリ島の地図。インドネシアのほぼ中央に位置する。島の東側にある印は聖なる山としてバリ人の信仰の対象にもなっているアグン山。（Google map より）

写真 3　バリ島の農村。バリ島の内陸部にはこのような田園風景が広がり、バリ島の原風景となっている。温暖な気候であるため、米は一年に三度収穫する三毛作が行われている。（筆者撮影）

写真 4 アグン山（標高 3,014m）。バリ島人の方向感覚の基準となっている。近年、噴火活動が活発化している。（筆者撮影）

写真 5　屋敷寺。バリの一般的な家屋では、アグン山に近いカジャの場所の屋敷寺が建てられている。家屋のなかで最も大事な場所である。（筆者撮影）

写真 6 儀礼の様子。地面に座り祈りを捧げる村人(カーストはスードラ)。一方、写真の奥、高台の上に座り礼拝を導くのは僧侶ブラフマナ。このように立ち居振る舞いにより、それぞれのカーストを知ることができると同時に、異なるカーストのもの同士が会話する場合には、それぞれが使う言葉は明確に決められている。（筆者撮影）

写真 7 結婚式。結婚式は、新郎と新婦それぞれの家の屋敷寺で、僧侶を招いて行われる。両手を合わせて祈る男女は新郎と新婦であり、写真右上のすこし高いところにおられる白色の正装の方は結婚式をとりしきる僧侶。（筆者撮影）

写真 8 オダランにおけるチャロナラン劇の上演。舞台中央にいるのが聖獣バロン。宗教、慣習、芸術はバリ人の文化規範であり、儀礼ではそれが一体となり象徴的にあらわれる。（筆者撮影）

写真 9 ベンジョール。ガルンガンからクニンガンのあいだ、祖霊神や自然神はベンジョールを目印にしてこの世に戻る。様々な趣向を凝らしたベンジョールが通りに立てられると、村の雰囲気は一変し、神聖で晴れやかな雰囲気が村に浸透する。（筆者撮影）

（受付日：2021 年 3 月 8 日）